

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
根室市	根室市立北斗小学校	315

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 本実践研究を適切に行うための推進体制

本事業関係者や学校力向上に関する総合実践事業（注1）の管理職、PTA関係者等で構成した「学力向上推進協議会」を開催し、推進地区及び協力校に対する指導助言や本実践研究の成果等の検証を行った。

- ・第3回学力向上推進協議会：令和元年7月18日（木）
- ・第4回学力向上推進協議会：令和元年12月20日（金）

(2) 推進地域としての支援策

① 学習指導の充実に向けた指導助言

- ・協力校に対して、平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査結果で明らかになった課題を踏まえた検証改善サイクルの確立に係る実践事例を示すなど、課題解決の具体的な取組を支援した。
- ・協力校に対して、身に付けさせたい力に応じた適切な言語活動の位置付けや児童が学習に見通しをもち、主体的に学習に取り組めるよう、授業の冒頭における学習課題の提示や学習課題と正対したまとめを行うこと、学習課題の質の向上を図ること、終末の場面におけるまとめや振り返りを位置付けることなど、授業改善の促進を働きかけた。
- ・学校全体での学習環境の整備・充実に関わり、学習規律の徹底やノート指導の統一、ICTの積極的な活用に係る実践事例を示すなど、課題解決の具体的な取組を支援した。

② 検証改善サイクルを基盤とした学校組織の構築に向けた指導助言

- ・推進地区、協力校に対して、「平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査 北海道版結果報告書」及び全国学力・学習状況調査の調査結果を詳細に分析することができる「分析ツール北海道版」（注2）を提供し、調査結果に基づく分析資料の作成を支援し、協力校の学力向上に係る課題を明確化した。
- ・北海道独自の問題「ほっかいどうチャレンジテスト」（注3）を「北海道学力向上Webシステム」（注4）で配信し、分析結果から児童一人一人のつまづきを把握し、課題の解決に向けた取組が促進されるよう働きかけた。

- ③ 家庭や地域との協働関係構築への支援
 - ・保護者や地域住民と課題を共有した学力向上に関する取組の推進に向け、「平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査 北海道版結果報告」及び「分析ツール北海道版」を提供し、全国学力・学習状況調査の分析結果や改善方策、学力及び生活リズムに関する明確な数値目標などを設定できるようにした。
- ④ 推進地区及び協力校への指導助言の充実
 - ・協力校に対し、指導主事による学校訪問を充実し、授業参観及び指導内容・指導方法等について協議し、具体的な改善方策を示した。（延べ8回訪問）

2. 推進地区における取組

(1) 学習指導の充実

- ① 思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業改善
 - ・協力校に対し、定期的に学校教育指導参事が訪問し、授業改善に係る指導助言を行った。
 - ・12月に市内全小・中学校で標準学力検査を実施した。検査結果を基に、各校において、分析を行い、自校の課題等を全教職員が共通理解するとともに、課題解決に向けた授業改善の取組について検討した。
- ② 学習規律の徹底及び基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る取組
 - ・発達の段階に応じて、低・中・高学年で学習規律を設定し、指導の徹底に取り組むとともに、教員だけではなく児童と共通理解を図り、板書と関連付けたノートづくりを行うよう指導助言した。

(2) 検証改善サイクルを基盤とした学校組織の構築

- ① 各種調査結果等を活用した検証改善サイクルの確立
 - ・道教委が作成した「分析ツール北海道版」等を活用した全国学力・学習状況調査の詳細な分析、全国学力・学習状況調査や標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」等の結果分析を踏まえた授業改善について指導助言した。
- ② 教員の指導力向上に向けた取組
 - ・指導力の向上に向け、実践的な研究を推進するよう指導助言した。
 - ・「主体的・対話的で深い学び」の実践に効果を上げている先進地域への視察研修を行うとともに、先進地域の小学校の教員を外部講師として招き、教員の指導力向上に向けた研修会を開催し、研修会の内容を校内研修等で還元するよう指導助言した。

3. 協力校における取組

(1) 学習指導の充実

- ① 思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業の実施
 - ・児童の思考力・判断力・表現力等を育むため、各教科の単元において、学習指導要領の目標を達成させるために有効な言語活動を位置付けるとともに、単元の流れや学習活動を示した「学びのガイド」を活用し、学習の見通しをもたせたり、意見と意見をつなげる「虹色階段」や自分の意見や立場を明らかにして意図的に意見をつなぐ「ハンドサイン」を用いた学び合いを行ったりする授業を展開した。

- ② 実物投影機等のICTの活用による指導の充実
- ・全ての教科において、導入時における既習事項の確認、課題や資料の提示、児童の考えの発表等、学習の目的や内容に応じて実物投影機を積極的に活用した。
 - ・体育科の授業では、タブレットを用い、動画に合わせて準備運動を行わせたり、マット運動やハードル走などの運動の様子を撮影して振り返り、改善点を話し合わせたりする取組を行った。
- ③ 学習規律（ノート指導を含む）の徹底
- ・児童の発達の段階に応じて、低・中・高学年で学習規律を設定し、指導の徹底を図った。
 - ・ノート指導については、ノートづくりのポイントを示し、板書と関連付けたノートづくりを行うとともに、その成果を児童が確認する機会として「ほくコレノート検定」を実施し、望ましいノートづくりについて児童と教員が共通理解して取り組んだ。
- ④ 指導方法工夫改善加配を活用した個に応じた学習による指導方法等の工夫
- ・算数科において第3学年から第6学年で指導方法工夫改善加配によるチーム・ティーチングや習熟度別少人数指導を実施した。「ほっかいどうチャレンジテスト」や標準学力検査などの結果から明らかになった各学年の課題を踏まえ、単元ごとにチーム・ティーチングと習熟度別少人数指導のどちらが効果的かを検討し、年間指導計画に位置付け、指導した。
- ⑤ 放課後や長期休業期間等を活用した効果的・計画的な補充学習の充実
- ・長期休業を利用し、国語科及び算数科の基礎的・基本的な学習内容の定着を中心とした復習の機会を設定した。
 - ・単元テストで目標点に達しなかった児童や、学習内容の定着に課題の見られた児童に対して、対象児童や保護者の同意の下、放課後学習を実施した。当該児童のつまずきの要因に応じ、段階を追って丁寧に指導することを通して、児童が自分で解決できたという実感をもてるよう進めた。
- ⑥ 授業内容との関連を図った家庭学習の工夫改善
- ・4月に保護者へ「家庭学習のすすめ」及び「家庭学習の手引き」を配付し、家庭学習のねらいや家庭学習の取り組み方について啓発した。児童には「かていがくしゅう」を配付し、家庭学習の方法などを示すとともに、各学級において取り組み方を指導した。
- (2) 検証改善サイクルを基盤とした学校組織の構築
- ① 道教委が作成した「分析ツール北海道版」等を活用した全国学力・学習状況調査の詳細な分析
- ・主幹教諭を中心に教務担当教員、研修担当教員、指導方法工夫改善加配教員でチームをつくり、「分析ツール北海道版」を活用して、全国学力・学習状況調査の結果について、無回答率や誤答率、下位層の児童の学習状況等を基に分析を行った。分析した結果は、職員会議で報告し全教職員で共通理解を図るとともに、国語科における自分の考えを広げたり深めたりする単位時間の振り返りの在り方や、算数科における各学年の重点指導単元、指導体制等について協議し、全教職員で授業改善に取り組んだ。
- ② 全国学力・学習状況調査や標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」等の結果を踏まえた授業改善の実施

- ・標準学力検査や「ほっかいどうチャレンジテスト」については、主幹教諭、教務担当教員が中心となり結果を分析した。「自分の考えについて根拠をもとに説明すること」や「条件に合わせて記述すること」などに課題が見られたため、全ての教科の授業において、自分の考えをもち、表現する活動を位置付けたり、自分の考えを広げたり深めたりする伝え合いの場面を設定したりするなど、言語活動を充実させた。

③ 教員の指導力向上のための校内研修の実施

- ・学校の教育目標や平成30年度に実施した各種調査等の結果などを踏まえ、今年度の研修テーマを「自分の考えを豊かに伝えあう子どもの育成」と設定し、児童が主体的・対話的に学び合い、自分の考えを広げたり深めたりできるような授業実践を進めた。
- ・先進校への視察で参考となった「虹色階段」や「ハンドサイン」の活用、「児童同士が立場を明確にして話し合ったり、友達の考えを聞いて自分の考えをつなげたり深めたりする授業」の実施を行い、相互参観しながら児童の姿で検証し、改善を図るとともに、本校の課題の1つである読書習慣の定着に向け、朝読書の活性化や読書環境の整備について研修部から具体的に提案し、各学級で取組を進めた。
- ・メンター研修を実施し、初任段階教員の困り感に応じて先輩教員が具体的な方法を示したり、実践を紹介したりするなど、初任段階教員だけでなく先輩教員であるミドルリーダーの指導力の向上を図った。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 全国学力・学習状況調査による検証

① 教科調査結果

- ・平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査においては、国語、算数ともに平均正答率が全国を下回った。
- ・国語では、「目的に応じて、本や文章全体を概観して効果的に読むこと」や「話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って、自分の理解を確認するための質問をすること」で成果が見られた一方、「情報を相手に分かりやすく伝えるための記述の仕方の工夫を捉えること」や「目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書くこと」など、「書くこと」の領域で課題が見られた。
- ・算数では、特に「量と測定」で全国を22.2ポイント下回るなど、大きな課題が見られた。

② 質問紙調査結果

- ・児童質問紙調査においては、「先生は、あなたの良いところを認めてくれている」の質問で、肯定的な回答をした児童の割合が98.0%（全国平均86.1%、H30北斗小96.3%）、「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないことについて、分かるまで教えてくれている」の質問で肯定的な回答している児童の割合が98.0%（全国平均91.7%、H29北斗小83.3%）となっており、教職員の児童への適切な関わりや信頼関係の構築、全ての児童を取り残さない指導の成果が確認できた。
- ・「家で自分で計画を立てて勉強をしている」の質問で、肯定的な回答をしている児童の割合が80.4%（全国平均71.5%、H30北斗小79.6%）となっており、全教職員で家庭学習

の提示の仕方について共通理解を図り取組を推進したことにより、児童が家庭で自ら計画を立てて学習する習慣が定着してきていると考えられる。

(2) 標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」による検証

① 標準学力調査の経年変化

- ・今年度、これまで実施していた日本標準のCRT標準学力テスト（2月実施）を東京書籍の標準学力検査（12月実施）に変更した。そのため、単純な経年変化とはならないが、全国平均を100とした場合の正答率を用いて比較した。
- ・平成30年度と令和元年度の同一集団の結果を比較すると、全ての学年で正答率が下がった。国語では、特に、「書くこと」について全国平均との差が大きく開いている学年が多かった。このことは、平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の結果と一致しており、思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業の展開や、自分の考えを広げたり深めたりする学習活動を一層充実させる必要がある。
- ・算数では、全ての領域で全国平均を下回っているが、特に、「量と測定」について課題が見られた。この結果も、平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の結果と同様であり、児童が主体的に解決に向かえるような課題の設定や、児童同士が課題解決に向けて説明し合ったり教え合ったりする場面の設定、習熟度別少人数指導など指導体制の工夫等を一層充実させ、基礎的・基本的な学力の確実な定着を図るとともに、既習事項を活用するなどした思考力・判断力・表現力等を育成する必要がある。

② 「ほっかいどうチャレンジテスト」の経年変化

- ・令和元年度の学年末問題は、これから実施するため、2学期末問題の数値で代用し、経年変化を把握した。
- ・全道平均を100として前年度と比較すると、現在の第3学年、第4学年及び第5学年の算数では向上したものの、その他の学年、教科では全道との差が開く結果となった。
- ・国語は、「条件に合わせて記述する」設問で、算数では、「絵から足し算やかけ算の問題をつくる」「式を説明する」設問で、特に正答率が低かった。これらについては、年度当初から本校の課題として全教職員で共通理解し、改善を図る取組を続けてきたところであるが、目に見える成果として表れていないことから、引き続き検証改善を繰り返して、児童の学力の向上を目指していく必要がある。

(3) 児童及び保護者アンケート、教師の自己評価による検証

① 児童アンケート

- ・7月と12月に児童による授業評価を実施している。
- ・7月と12月の結果を比較すると、「課題提示」がやや下がっているものの、その他の項目は向上している。「わかりやすさ」「教え方」「考える時間」「振り返り」が向上しており、このことは、今年度、研修内容に位置付け全校で取り組んできた「課題解決に向けた見通し」「目的に応じた意図的な交流場面の設定と考えをつなぐためのツールの活用」「自分の考えをもつ時間の確保」「視点を明らかにした振り返り」等の成果であると考えられる。

② 保護者アンケート

- ・ 7月と12月に保護者アンケートを実施している。
- ・ 7月と12月の結果を比較すると、全ての項目においてA評価の割合が増えている。これは、保護者が、協力校の取組を理解している結果であると考えられる。
- ・ 「早寝早起き」についてC評価の割合が増えており、生活習慣の定着に課題が見られる。望ましい生活習慣の定着は、児童の豊かな心と健やかな体を育み、確かな学力を身に付けるために重要であることから、本校で実施している児童に生活習慣を振り返らせる等の取組を通し、家庭と連携しながら望ましい生活習慣の定着を図っていく必要がある。

③ 教師による自己評価（満点4.0）

- ・ 12項目中8項目（うち3.0以上が6項目）において、平成31年1月から令和元年12月にかけて評価が高くなっており、取組の成果が見られる。
- ・ 「目的を明確にした話し合う活動や各教科等の特質に応じた言語活動の充実」「思考力、判断力、表現力等を高める授業の実施」に関する項目では、平成31年1月と比較し、それぞれ0.3、0.38上昇しており、今年度の取組内容の1つである「思考力、判断力、表現力等を育む言語活動を位置付けた授業の実施」が教職員全体で共通理解され、確実に実施されたことが窺える。
- ・ 本事業を踏まえ、平成30年9月に新設した、ICTの活用やティーム・ティーチングの有効活用、補充的な学習等の項目についても、取組を推進したことにより、教職員の学力向上に向けた意識の高揚が見られる。
- ・ 教職員の取組が、児童の学力向上に確実につながるよう、取組の質の向上を図るとともに、児童の姿で成果を検証し、改善の方策を検討、実施していく必要がある。

2. 実践研究全体の成果

- 定期的な学力向上推進協議会の開催や継続的な学校訪問を行ったことにより、推進地域、推進地区、協力校代表者等での取組の進捗状況、成果や課題の共有や、推進地区及び協力校に対するきめ細かな支援を行うことができた。
- 協力校による公開研究会（実践発表会）を実施したことにより、推進地区及び協力校の取組の成果等を広く普及することができた。
- 各種調査等の結果の分析により、成果と課題を明らかにするとともに、言語活動の充実や学習規律の統一などに取り組むことができた。

3. 取組の成果の普及

- 公開研究会等を開催し、学力向上の取組や成果を普及した。
 - ① 「第3回北海道学力向上推進協議会」（令和元年7月18日（木）、参加人数：22名）
 - 内 容：全学級授業公開、今年度の取組についての説明及び協議
 - 会 場：根室市立北斗小学校
 - 参加対象：北海道学力向上推進協議会委員、北海道教育委員会担当者等
 - ② 「根室市立北斗小学校実践発表会」（令和元年12月7日（土）、参加人数：84名）
 - 内 容：全学級授業公開、特設授業公開、今年度の取組についての説明

会 場：根室市立北斗小学校

参加対象：北海道学力向上推進協議会委員、北海道教育委員会担当者、根室市教育委員会担当者、市内幼稚園、小・中学校教職員等

③ 「第4回北海道学力向上推進協議会」（令和元年12月20日（金）、参加人数：22名）

内 容：全学級授業公開、先進地域・先進校視察報告、今年度の取組についての説明及び協議

会 場：根室市立北斗小学校

参加対象：北海道学力向上推進協議会委員、北海道教育委員会担当者等

○ 今後の課題

- ・ 検証改善サイクルの確立や学校組織の構築などの本実践研究の取組の成果を、令和2年度全国学力・学習状況調査等の結果から検証する必要がある。
- ・ 全国学力・学習状況調査問題や「平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査 北海道版結果報告書」、「授業アイデア例」（国立教育政策研究所）等を積極的に活用し、授業改善を推進する必要がある。
- ・ 「ほっかいどうチャレンジテスト」を繰り返し活用し、児童一人一人の課題を踏まえ、学習内容の確実な定着を図る取組を継続的に進める必要がある。
- ・ 各種調査結果等に基づき、数値目標を設定するなどして、目的を明確にして取組を推進するとともに、確実な検証により取組の改善を図っていく必要がある。
- ・ 推進地区及び協力校の取組の成果を域内の小・中学校と共有し、域内の各学校において、学力向上の取組の充実を図る必要がある。
- ・ 推進地区及び協力校の取組をWebページで紹介するなど、成果を普及する必要がある。

（注1）「学校力向上に関する総合実践事業」

- ・ 管理職のリーダーシップの下、包括的な学校改善を推進することにより、当該校から将来のスクールリーダーを輩出する新たな仕組を構築するため、道教委が指定する実践指定校において実施している事業
- ・ 平成24年度から実施

（注2）「分析ツール北海道版」

- ・ 各市町村や学校が、自らの結果を詳細に分析できるよう、レーダーチャート、下位層の状況、学校間のばらつきなどのデータが簡単に作成できるツール
- ・ 平成24年度から継続して作成

（注3）「ほっかいどうチャレンジテスト」

- ・ 各学校や家庭において学力向上や学習習慣の改善に日常的に取り組めるよう、学期ごとの学習内容や、本道の児童生徒が苦手としている内容等を踏まえた国語、算数・数学、理科、社会、英語の問題
- ・ 平成21年度から継続して作成し、道教委Webページに掲載

（注4）「北海道学力向上Webシステム」

- ・ ほっかいどうチャレンジテストの集計・分析の時間短縮及び全道・管内と比べた自校の基

礎学力の状況の把握が行えるシステム

- 集計結果に基づき、児童のつまずきに応じたきめ細かな指導や放課後等の補充的な学習サポートの充実などに生かすことが可能
- 平成 24 年度から使用

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

推進地区名	根室市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

(1) 学習指導の充実

- ・思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業改善
- ・学習規律の徹底及び基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る取組

(2) 検証改善サイクルを基盤とした学校組織の構築

- ・各種調査結果等を活用した検証改善サイクルの確立
- ・教員の指導力向上に向けた取組

2. 研究課題への取組状況

(1) 学習指導の充実

① 思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業改善

- ・協力校に対し、定期的に学校教育指導参事が訪問し、授業改善に係る指導・助言を行った。

第1回：令和元年5月14日（火）

（内容）基礎・基本の確実な定着を図るための課題提示や振り返りの在り方、学習規律の徹底に関する指導助言

第2回：令和元年11月18日（月）

（内容）思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業改善に関する指導助言

第3回：令和元年12月7日（土）

（内容）実践発表会における研究成果に係る指導助言

- ・12月に市内全小・中学校で標準学力検査を実施した。検査結果を基に、各校において、分析を行い、自校の課題等を全教職員が共通理解するとともに、課題解決に向けた授業改善の取組について検討した。

② 学習規律の徹底及び基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る取組

- ・発達の段階に応じて、小・中・高学年で学習規律を設定し、その意味や目的を教員だけでなく、児童と共通理解を図り、指導の徹底に取り組むとともに、板書と関連付けたノートづくりを行うよう指導助言した。

(2) 検証改善サイクルを基盤とした学校組織の構築

① 各種調査結果等を活用した検証改善サイクルの確立

道教委が作成した「分析ツール北海道版」等を活用した全国学力・学習状況調査の詳細な分析、全国学力・学習状況調査や標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」等の結果分析を踏まえた授業改善について文部科学省や道教委が作成した各種資料を提示しながら指導助言した。

② 教員の指導力向上に向けた取組

教員の指導力向上に向けて、実践的な研究を推進するよう指導助言した。また、「主体的・対話的で深い学び」の実践に効果を上げている先進地域に教員を派遣し、学習指導や学級経営、生活指導、校内研修の具体的な取組について校内研修等で還元するよう指導助言した。

また、先進地域の小学校教員2名を講師として招聘した模範授業を実施し、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業の具体を示すとともに、家庭学習における保護者との連携やICT機器の活用、授業改善に向けた教員相互の授業評価ツールなど先進地域の取組について説明を受けたり質問したりする機会を設定し、各学校の教育活動を一層充実させるよう指導助言した。

さらに、メンター研修を実施し、初任段階教員の困り感に応じて先輩教員が具体的な方法を示したり、実践を紹介したりするなど、初任段階教員だけでなく先輩教員であるミドルリーダーの指導力の向上を図った。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査結果

平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査において、国語及び算数・数学の平均正答率は、小学校は53.5、中学校は48.3であり、全国及び全道の平均正答率に達することができなかった。

また、平成30年度に比べ、全国及び全道との差が広がっていることや、小・中学校ともに、全ての領域において全国及び全道を下回っていることから、学力向上に向けた取組の一層の推進が重要となっている。

児童生徒質問紙では、「家で、自分で計画を立てて勉強している」と回答した児童の割合が全国及び全道を下回っているものの、平成30年度に比べ、0.1ポイント増加しており、各学校において、全教職員で家庭学習の提示の仕方について共通理解を図り取組を推進したことにより、児童生徒が家庭で自ら計画を立てて学習する習慣が定着してきていると考えられる。

(2) 標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」について

① 標準学力検査の経年

根室市では、今年度、これまで実施していた日本標準のCRT標準学力検査（2月実施）を東京書籍の標準学力検査（12月実施）に変更した。そのため、単純な経年変化とはならないが、協力校においては、全国平均を100とした場合の正答率を用いて比較した。

平成30年度と令和元年度の同一集団の結果を比較すると、全ての学年で正答率が下がった。国語では、特に、「書くこと」について全国平均との差が大きく開いている学年が多かった。

このことは、平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査の結果と一致しており、思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業の展開や、自分の考えを広げたり深めたりする学習活動を学校全体で徹底して取り組み、短いサイクルで検証改善を繰り返す必要があると考えられる。

また、算数では、全ての領域で全国平均を下回っているが、特に、「量と測定」について課題が見られた。

今後は、児童が主体的に解決に向かえるような課題の設定や、児童同士が課題解決に向けて説明し合ったり教

え合ったりする場面の設定、習熟度別少人数指導など指導体制の工夫等を一層充実させ、基礎的・基本的な学力の確実な定着を図るとともに、既習事項を活用するなどした思考力・表現力・判断力等の育成について指導助言していく。

② 「ほっかいどうチャレンジテスト」の経年変化

協力校においては、「チャレンジテスト学年末問題」(令和元年度は、3月実施のため2学期末問題の結果)における正答率の経年変化について、全道平均を100として前年度と比較すると、現在の第3学年、第4学年及び第5学年の算数では向上したものの、その他の学年、教科では全道との差が開く

結果となった。国語では、「条件に合わせて記述する」設問で、算数では、「絵から足し算やかけ算の問題をつくる」「式を説明する」設問で特に、正答率が低かった。

今後は、小学校低学年段階における基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るよう指導助言していく。

(国語)	H26	H27	H28	H29	H30	R1	
1年生時	93.3	101.0	93.8	97.5	100.8	92.3	現1年生
2年生時		101.6	102.1	96.4	104.3	96.8	現2年生
3年生時			85.9	97.0	98.9	97.7	現3年生
4年生時				92.2	107.3	96.6	現4年生
5年生時					91.3	98.6	現5年生
6年生時						92.5	現6年生

(算数)	H26	H27	H28	H29	H30	R1	
1年生時	90.9	99.7	93.3	95.8	102.6	90.1	現1年生
2年生時		96.8	100.1	97.1	100.1	83.0	現2年生
3年生時			91.6	101.3	98.4	94.9	現3年生
4年生時				85.7	97.7	95.0	現4年生
5年生時					86.0	88.1	現5年生
6年生時						80.2	現6年生

【標準学力検査結果の経年変化】

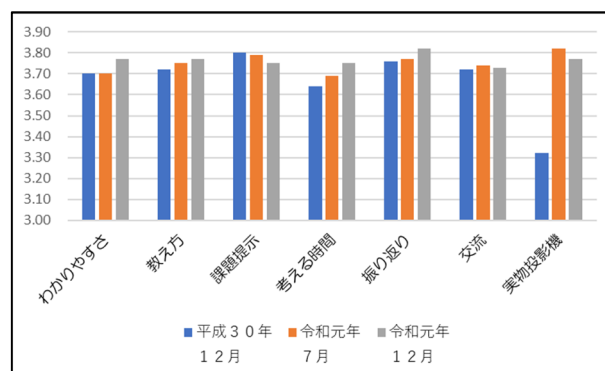
	平成29年度 (2月実施)				平成30年度 (2月実施)				令和元年度 (11月実施)			
	北斗	全道	全道比		北斗	全道	全道比		北斗	全道	全道比	
現1年									1年国語	11.6	12.8	90.6
									1年算数	6.8	7.8	87.2
現2年									1年国語	9.1	8.4	108.3
									2年国語	3.0	3.6	83.3
現3年	1年国語	8.3	8.3	100.0	2年国語	2.2	2.4	91.7	3年国語	3.4	3.2	106.3
	1年算数	10.2	10.1	101.0	2年算数	6.4	7.1	90.1	3年算数	7.9	8.5	92.9
現4年	2年国語	5.5	5.5	100.0	3年国語	3.1	3.7	83.8	4年国語	3.6	4.3	83.7
	2年算数	8.5	9.1	93.4	3年算数	7.5	9.4	79.8	4年算数	7.0	7.8	89.7
現5年	3年国語	6.7	7.0	95.7	4年国語	3.6	4.4	81.8	5年国語	2.4	3.1	77.4
	3年算数	10.2	10.8	94.4	4年算数	8.9	9.5	93.7	5年算数	5.5	5.7	96.5
現6年	4年国語	6.4	7.2	88.9	5年国語	7.5	8.8	85.2	6年国語	2.5	3.2	78.1
	4年算数	9.0	10.7	84.1	5年算数	7.5	10.3	72.8	6年算数	4.0	6.9	58.0

【ほっかいどうチャレンジテスト学年末問題結果の経年変化】

(3) 児童及び保護者アンケート、教師の自己評価による検証

① 児童アンケート（満点4.0）

協力校において、7月と12月に実施している児童アンケートでは、7月と12月の結果を比較すると、「わかりやすさ」「教え方」「考える時間」「振り返り」が向上しており、このことは、今年度、研修内容に位置付け全校で取り組んでいる「課題解決に向けた見通し」「目的に応じた意図的な交流場面の設定と考えをつなぐためのツールの活用」「自分の考えをもつ時間の確保」「視点を明らかにした振り返り」等の成果であると考えられる。



② 保護者アンケート

協力校において、7月と12月に実施している保護者アンケートでは、7月と12月の結果を比較すると、全ての項目でA評価の割合が増加している。（特に、本事業の指定を受け、新設した「話し合いの場面」「授業と関連のある家庭学習の提示」の項目については、肯定的な回答の割合が「話し合いの場面」で100%、「家庭学習の提示」で95.1%であり、前年度の評価結果を踏まえた取組が確実に行われた成果であると考えられる。）

一方、「早寝早起き」について、C評価の割合が増えており、生活習慣の定着に課題が見られることから、協力校で実施している児童に生活習慣を振り返らせる等の取組を通じて、家庭と連携しながら望ましい生活習慣の定着を図っていくよう指導助言する。

③ 教師による自己評価（満点4.0）

協力校において、12項目中8項目（うち3.0以上が6項目）において、平成31年1月から令和元年12月にかけて評価が高くなっており、取組の成果が見られる。特に、「目的を明確にした話し合う活動や各教科等の特質に応じた言語活動の充実」「思考力、判断力、表現力等を高める授業の実施」に関する項目では、平成31年1月と比較し、それぞれ0.3、0.38上昇しており、今年度の取組内容の1つである「思考力、判断力、表現力等を育む言語活動を位置付けた授業の実施」が教職員全体で共通理解され、確実に実施されたことが窺える。

また、本事業を踏まえ、平成30年9月に新設した、ICTの活用やチーム・ティーチングの有効活用、補充的な学習等の項目についても、取組を推進したことにより、教職員の学力向上に向けた意識の高揚が見られる。

今後は、教職員の取組が、児童の学力向上に確実につながるよう、取組の質の向上を図るとともに、児童の姿で成果を検証し、改善の方策を検討、実施するよう指導助言する。

	具体的項目	H30.4	H30.9	H31.1	R1.12
(1)	学校経営方針やグランドデザインに基づく学力向上に向けた組織的な取組の改善・充実により、 学力に関わる数値目標等の達成を図る。	2.96	3.08	3.20	3.16
(2)	各種調査等の結果から課題が明らかとなった領域の繰り返し指導や毎時間の学習の振り返り活動により、 基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。	2.54	2.79	2.70	2.83
(3)	目的を明確にした話し合う活動や各教科等の特質に応じた言語活動の充実により、 思考力、判断力、表現力等を高める。	2.84	2.88	3.20	3.25
(4)	子どもが見通しをもって学習に取り組むことができる目標提示により、 学習意欲を高め、主体的に課題解決に取り組む態度を育む。	2.67	2.75	2.80	3.07
(5)	教職員の共通理解を図った指導の充実により、 一貫した学習規律の徹底を図る。	2.80	2.96	3.10	3.40
(6)	家庭や地域と連携した学力向上の取組により、 目安の家庭学習時間等の達成を図る。	2.54	2.71	2.70	3.08
H30.9月 より新設	(1)授業では、わかりやすい授業となるよう、実物投影機などICTを活用している。	3.16	3.38	3.40	3.48
	(2)授業では、加配教員を効果的に活用して個に応じた志度の充実が図られている。	2.88	2.96	3.20	3.28
	(3)放課後や長期休業期間を活用した効果的・計画的な補充学習を行っている。	3.40	3.42	3.60	3.30
		3.04	3.29	3.50	3.11
		2.80	2.92	2.90	2.85
		2.50	2.63	2.70	2.96
			2.79	3.15	3.43
			3.21	3.26	3.38
			2.79	2.84	2.84

4. 今後の課題

(1) 学校組織の強化

- ① 全教職員による全国学力・学習状況調査等の各種調査結果の詳細な分析及び改善策の検討と共通理解の確実な実施
- ② 校内及び校外研修の更なる活性化を図るための組織体制の整備
- ③ 特別な教育的支援を必要とする児童への指導や支援体制の整備及び市の保健福祉課や幼児教育施設と連携した円滑な接続体制の整備

(2) 教員の指導力向上

- ① 単元で育成を目指す資質能力を明確にした単元構成及び授業展開の工夫
- ② 児童に思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業の展開など、個々の授業デザイン力の向上
- ③ 児童との学びを支える学習規律の意味や目的の共有と指導の徹底
- ④ 先進地視察の継続実施及び外部講師を招聘した模範授業や研究協議等の実施

(3) 基礎的・基本的な学習内容の確実な定着

- ① 意図的・計画的な習熟度別少人数指導など個に応じた指導の充実
- ② 放課後や長期休業期間等を活用した補充的な学習の充実
- ③ 授業内容との関連を図った家庭学習の提示及び家庭と連携した家庭での学習習慣定着に向けた取組の工夫改善
- ④ ICT環境の整備

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	北海道	番号	01
-------	-----	----	----

協力校名	北海道根室市立北斗小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

本校では平成28年度から国語科の「読むこと」領域に焦点を当てて校内研修に取り組んでおり、平成30年度の全国学力・学習状況調査の国語A・国語B・算数Bにおいて全国平均を上回るなどの成果が見られている。しかし算数A・理科においてはそれぞれ0.5、1.3ポイント全国平均を下回るなど課題が見られた。また、CRT標準学力検査においては、第1・2・6学年で国語科・算数科、第4学年で国語科において全国平均を上回ったが、第4学年の算数科、第3・5学年の国語科及び算数科で全国平均を下回るなど課題が見られた。

また、平成30年度の全国学力・学習状況調査児童質問紙調査では、平成29年度と比較し、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」の設問において肯定的な回答をした児童の割合は高くなっているものの、否定的な回答をした児童の割合が14.9ポイントになるなど、引き続き課題が見られた。

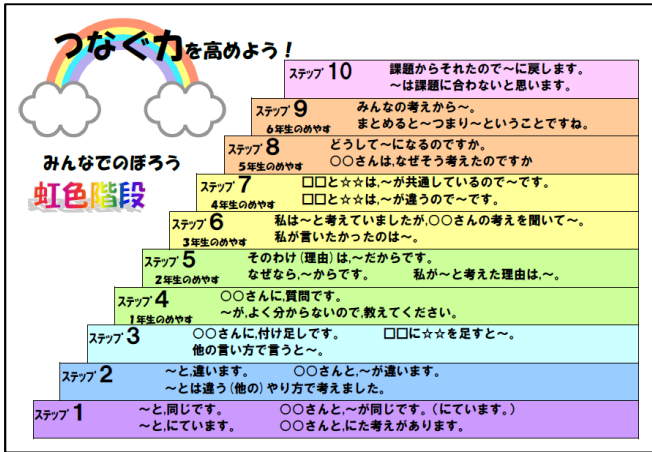
さらに、学習指導については、有効な指導方法の共通理解・共通指導が浸透しつつあることや、チームで全国学力・学習状況調査の結果の分析に当たるなど、組織的な人材育成や授業改善は浸透しつつあるものの、さらに取組の精度を高めることが課題になっており、全ての児童の学力を全国的な水準まで底上げするために、カリキュラム・マネジメントの視点からの学校組織の構築が急務である。

2. 協力校としての取組状況

(1) 学習指導の充実

① 思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業の実施

児童の思考力・判断力・表現力等を育むため、各教科の単元において、学習指導要領の目標を達成させるために有効な言語活動を位置付けるとともに、単元の流れや学習活動を示した「学びのガイド」を活用し、学習の見通しをもたせたり、意見と意見をつなげる「虹色階段」（図1）や自分の意見や立場を明らかにして意図的に意見をつなぐ「ハンドサイン」（図2）を用いた学び合いを行ったりする授業を展開した。



【図1 つなぐ言葉の虹色階段】



【図2 ハンドサイン】

② 実物投影機等のICTの活用による指導の充実

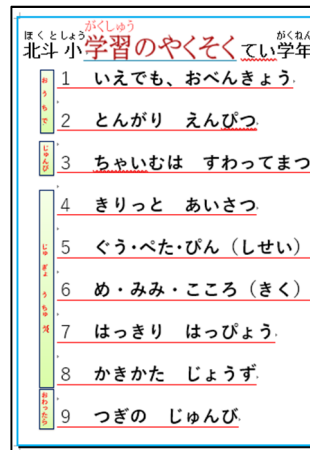
全ての教科において、導入時における既習事項の確認、課題や資料の提示、児童の考えの発表等、学習の目的や内容に応じて実物投影機を積極的に活用した。

また、体育科の授業では、タブレットを用い、動画に合わせて準備運動を行わせたり、マット運動やハードル走などの運動の様子を撮影して振り返り、改善点を話し合わせたりする取組を行った。

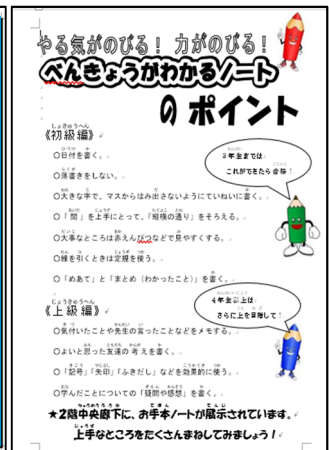
③ 学習規律（ノート指導を含む）の徹底

児童の発達の段階に応じて、低・中・高学年で学習規律（図3）を設定し、指導の徹底を図った。

また、ノート指導については、ノートづくりのポイント（図4）を示し、板書と関連付けたノートづくりを行うとともに、その成果を児童が確認する機会として「ほくコレノート検定」を実施し、望ましいノートづくりについて児童と教員が共通理解して取り組んだ。



【図3 学習規律】



【図4 ノートづくり】

④ 指導方法工夫改善加配を活用した個に応じた学習による指導方法等の工夫

算数科において第3学年から第6学年で指導方法工夫改善加配によるチーム・ティーチングや習熟度別少人数指導を実施した。「ほっかいどうチャレンジテスト」や標準学力検査などの結果から明らかになった各学年の課題を踏まえ、単元ごとにチーム・ティーチングと習熟度別少人数指導のどちらが効果的かを検討し、年間指導計画に位置付け、指導した。

※「平成31年度算数指導方法工夫改善計画」を添付 資料1

⑤ 放課後や長期休業期間等を活用した効果的・計画的な補充学習の充実

長期休業を利用し、国語科及び算数科の基礎的・基本的な学習内容の定着を中心とした復習の機会を設定した。

また、単元テストで目標点に達しなかった児童や、学習内容の定着に課題の見られた児童に対して、本人や保護者の同意の下、放課後学習を実施した。当該児童のつまずきの要因に応じ、段階を追って丁寧に指導することを通して、児童が自分で解決できたという実感をもてるよう進めた。

⑥ 授業内容との関連を図った家庭学習の工夫改善

4月に保護者へ「家庭学習のすすめ」及び「家庭学習の手引き」を配付し、家庭学習のねらいや家庭学習の取り組み方について啓発した。児童には「かていがくしゅう」を配付し、家庭学習の方法などを示すとともに、各学級において取り組み方を指導した。

※「家庭学習のすすめ」「家庭学習の手引き」を添付 資料2-1、2

(2) 検証改善サイクルを基盤とした学校組織の構築

① 道教委が作成した「分析ツール北海道版」等を活用した全国学力・学習状況調査の詳細な分析

主幹教諭を中心に教務担当教員、研修担当教員、指導方法工夫改善加配教員でチームをつくり、「分析ツール北海道版」を活用して、全国学力・学習状況調査の結果について、無回答率や誤答率、下位層の児童の学習状況等を基に分析を行った。分析した結果は、職員会議で報告し全教職員で共通理解を図るとともに、国語科における自分の考えを広げたり深めたりする単位時間の振り返りの在り方や、算数科における各学年の重点指導単元、指導体制等について協議し、全教職員で授業改善に取り組んだ。

② 全国学力・学習状況調査や標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」等の結果を踏まえた授業改善の実施

標準学力検査や「ほっかいどうチャレンジテスト」について、主幹教諭、教務担当教員が中心となり結果を分析した。「自分の考えについて根拠をもとに説明すること」や「条件に合わせて記述すること」などに課題が見られたため、全ての教科の授業において、自分の考えをもち、表現する活動を位置付けたり、自分の考えを広げたり深めたりする伝え合いの場面を設定したりするなど、言語活動を充実させた。

③ 教員の指導力向上のための校内研修の実施

学校の教育目標や平成30年度に実施した各種調査等の結果などを踏まえ、今年度の研修テーマを「自分の考えを豊かに伝えあう子どもの育成」と設定し、児童が主体的・対話的に学び合い、自分の考えを広げたり深めたりできるような授業実践を進めた。

また、先進校への視察で参考となった「虹色階段」や「ハンドサイン」の活用、「児童同士が立場を明確にして話し合ったり、友達の考えを聞いて自分の考えをつなげたり深めたりする授業」を実施し、相互参観しながら児童の姿で成果と課題を検証し、課題について改善を図るとともに、本校の課題の1つである読書習慣の定着に向け、朝読書の活性化や読書環境の整

備について研修部から具体的に提案し、各学級で取組を進めた。

さらに、メンター研修を実施し、初任段階教員の困り感に応じて先輩教員が具体的な方法を示したり、実践を紹介したりするなど、初任段階教員だけでなく先輩教員であるミドルリーダーの指導力の向上を図った。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査による検証

平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査においては、国語、算数ともに平均正答率が全国を下回った。国語では、「目的に応じて、本や文章全体を概観して効果的に読むこと」や「話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って、自分の理解を確認するための質問をすること」で成果が見られる一方、「情報を相手に分かりやすく伝えるための記述の仕方の工夫を捉えること」や「目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書くこと」等、特に「書くこと」の領域で課題が見られた。算数では、特に「量と測定」で全国を22.2ポイント下回るなど、大きな課題が見られた。

児童質問紙調査においては、「先生は、あなたの良いところを認めてくれている」の質問で、肯定的な回答をした児童の割合が98.1%（全国平均86.1%、H30北斗小96.3%）、「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないことについて、分かるまで教えてくれている」の質問で、肯定的な回答している児童の割合が98.0%（全国平均91.7%、H29北斗小83.3%）となっており、教職員の児童への適切な関わりや信頼関係の構築、全ての児童を取り残さない指導の成果が確認できた。また、「家で自分で計画を立てて勉強をしている」の質問で、肯定的な回答をしている児童の割合が80.4%（全国平均71.5%、H30北斗小79.6%）となっており、全教職員で家庭学習の提示の仕方について共通理解を図り取組を推進したことにより、児童が家庭で自ら計画を立てて学習する習慣が定着してきていると考えられる。

※「平成31年度全国学力・学習状況調査分析結果」を添付 資料3

(2) 標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」による検証

① 標準学力検査の経年変化

今年度、これまで実施していた日本標準のCRT標準学力テスト（2月実施）を東京書籍の標準学力検査（12月実施）に変更した。そのため、単純な経年変化とはならないが、全国平均を100とした場合の正答率を用いて比較した。

平成30年度と令和元年度の同一集団の結果を比較すると、全ての学年で正答率が下がった。国語では、特に、「書くこと」について全国平均との差が大きく開いている学年が多かった。このことは、平成31年度（令和元年度）全国学力・

標準学力検査（H26～H30までは日本標準、R1は東京書籍）結果より							
（国語）							
	H26	H27	H28	H29	H30	R1	
1年生時	93.3	101.0	93.8	97.5	100.8	92.3	現1年生
2年生時		101.6	102.1	96.4	104.3	96.8	現2年生
3年生時			85.9	97.0	98.9	97.7	現3年生
4年生時				92.2	107.3	96.6	現4年生
5年生時					91.3	98.6	現5年生
6年生時						92.5	現6年生
（算数）							
	H26	H27	H28	H29	H30	R1	
1年生時	90.9	99.7	93.3	95.8	102.6	90.1	現1年生
2年生時		96.8	100.1	97.1	100.1	83.0	現2年生
3年生時			91.6	101.3	98.4	94.9	現3年生
4年生時				85.7	97.7	95.0	現4年生
5年生時					86.0	88.1	現5年生
6年生時						80.2	現6年生

学習状況調査の結果と一致しており、思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業の展開や、自分の考えを広げたり深めたりする学習活動を一層充実させる必要がある。

また、算数では、全ての領域で全国平均を下回っているが、特に、「量と測定」について課題が見られた。この結果も、平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の結果と同様であり、

児童が主体的に解決に向かえるような課題の設定や、児童同士が課題解決に向けて説明し合ったり教え合ったりする場面の設定、習熟度別少人数指導など指導体制の工夫等を一層充実させ、基礎的・基本的な学力の確実な定着を図るとともに、既習事項を活用するなどした思考力・判断力・表現力等を育成する必要がある。

② 「ほっかいどうチャレンジテスト」の経年変化

令和元年度の学年末問題は、これから実施するため、2学期末問題の数値で代用し、経年変化を把握した。

全道平均を100として前年度と比較すると、現在の第3学年、第4学年及び第5学年の算数では向上したものの、その他の学年、教科では全道との差が開く結果となった。

		ほっかいどうチャレンジテスト (学年末問題 経年変化)													
		平成29年度 (2月実施)				平成30年度 (2月実施)				令和元年度 (11月実施)					
		北道	全道	全道比	北道	全道	全道比	北道	全道	全道比	北道	全道	全道比		
現1年	1年国語										11.6	12.8	906		
	1年算数										6.8	7.8	872		
現2年	1年国語				9.1	8.4	108.3	2年国語	3.0	3.6	83.3				
	1年算数				8.9	9.0	98.9	2年算数	5.5	6.6	83.3				
現3年	1年国語	8.3	8.3	100.0	2年国語	2.2	2.4	91.7	3年国語	3.4	3.2	106.3			
	1年算数	10.2	10.1	101.0	2年算数	6.4	7.1	90.1	3年算数	7.9	8.5	92.9			
現4年	2年国語	5.5	5.5	100.0	3年国語	3.1	3.7	83.8	4年国語	3.6	4.3	83.7			
	2年算数	8.5	9.1	93.4	3年算数	7.5	9.4	79.8	4年算数	7.0	7.8	89.7			
現5年	3年国語	6.7	7.0	95.7	4年国語	3.6	4.4	81.8	5年国語	2.4	3.1	77.4			
	3年算数	10.2	10.8	94.4	4年算数	8.9	9.5	93.7	5年算数	5.5	5.7	96.5			
現6年	4年国語	6.4	7.2	88.9	5年国語	7.5	8.8	85.2	6年国語	2.5	3.2	78.1			
	4年算数	9.0	10.7	84.1	5年算数	7.5	10.3	72.8	6年算数	4.0	6.9	58.0			

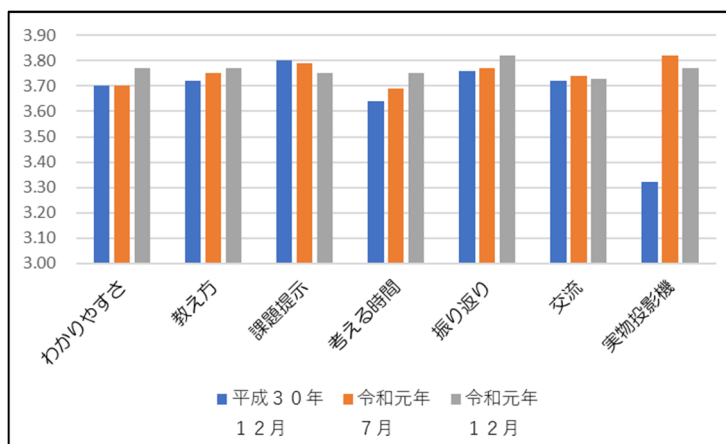
国語は、「条件に合わせて記述する」設問で、算数では、「絵から足し算やかけ算の問題をつくる」「式を説明する」設問で、特に、正答率が低かった。これらについては、年度当初から本校の課題として全教職員で共通理解し、改善を図る取組を続けてきたところであるが、目に見える成果として表れていないことから、引き続き検証改善を繰り返し、児童の学力の向上を目指していく必要がある。

(3) 児童及び保護者アンケート、教師の自己評価による検証

① 児童アンケート (満点4.0)

7月と12月に児童による授業評価を実施している。昨年度12月と今年度の結果を比較すると、「課題提示」がやや下がっているものの、その他の項目は向上している。

7月と12月の結果を比較すると、「わかりやすさ」「教え方」「考える時間」「振り返り」が向上しており、このことは、今年度、研修内容に位置付け全校で取り組んできた「課題解決に向けた見通し」「目的に応じた意図的な交流場面の設定と考えをつなぐためのツールの活用」「自分の考えをもつ時間の確保」「視点



を明らかにした振り返り」等の成果であると考えられる。

② 保護者アンケート

7月と12月に保護者アンケートを実施している。

7月と12月の結果を比較すると、全ての項目においてA評価の割合が増えている。これは、保護者が、本校の取組を理解している結果であると考えられる。(特に、学習に関わる設問(図赤枠内)において、A、B評価の割合が増えており、授業改善の成果が、保護者にも伝わっている結果だと考えられる。)

一方、「早寝早起き」についてC評価の割合が増えており、生活習慣の定着に課題が見られる。望ましい生活習慣の定着は、児童の豊かな心と健やかな体を育み、確かな学力を身に付けるために重要であることから、児童に生活習慣を振り返らせる等の取組を通し、家庭と連携しながら望ましい生活習慣の定着を図っていく必要がある。

※「保護者アンケートの結果」を添付 **資料4**

※左から、A、B、C、Dの割合
 A：よく当てはまる B：だいたい当てはまる
 C：あまり当てはまらない D：当てはまらない

6	読み・書き計算など基礎的・基本的な学習内容が定着している。	1回目	44.9	47.0	6.5	1.6
		2回目	51.9	46.2	1.9	0.0
7	授業では、自分でじっくり考えたり、友だちと話し合ったりする場面が確保されている。	1回目	48.6	45.4	5.9	0.0
		2回目	51.5	48.5	0.0	0.0
8	体験したり、調べた視する学習などを積極的に取り入れている。	1回目	49.7	46.0	4.3	0.0
		2回目	57.8	36.3	5.9	0.0
9	授業とつながりのある家庭学習が示されている。	1回目	42.5	48.9	7.0	1.6
		2回目	44.1	51.0	4.9	0.0
10	担任以外のいろいろな先生方も指導に入ること、道徳の授業が充実している。	1回目	45.4	51.9	2.2	0.5
		2回目	59.6	39.4	1.0	0.0
12	学校は健康や体力づくりを進めている。	1回目	41.4	51.1	7.0	0.5
		2回目	42.3	51.9	4.8	1.0
13	学校の教育活動についてはおおむね満足している。	1回目	44.9	50.3	4.3	0.5
		2回目	49.0	48.1	1.9	1.0
15	お子さんは、家庭で学習する習慣が身に付いている。	1回目	27.3	51.3	16.6	4.8
		2回目	34.6	49.0	14.4	1.9
16	お子さんは、早ね早起きができています。	1回目	27.3	51.3	16.6	4.8
		2回目	27.9	36.5	30.8	4.8

【保護者アンケートの結果（一部抜粋）】

③ 教師による自己評価（満点4.0）

12項目中8項目（うち3.0以上が6項目）において、平成31年1月から令和元年12月にかけて評価が高くなっており、取組の成果が見られる。特に、「目的を明確にした話し合う活動や各教科等の特質に応じた言語活動の充実」「思考力、判断力、表現力等を高める授業の実施」に関する項目では、平成31年1月と比較し、それぞれ0.3、0.38上昇しており、今年度の取組内容の1つである「思考力、判断力、表現力等を育む言語活動を位置付けた授業の実施」が教職員全体で共通理解され、確実に実施されたことが窺える。

また、本事業を踏まえ、平成30年9月に新設した、ICTの活用やチーム・ティーチング

の有効活用、補充的な学習等の項目についても、取組を推進したことにより、教職員の学力向上に向けた意識の高揚が見られる。

今後は、教職員の取組が、児童の学力向上に確実につながるよう、取組の質の向上を図るとともに、児童の姿で成果を検証し、改善の方策を検討、実施していく。

具体的項目		H30.4	H30.9	H31.1	R1.12
(1)	学校経営方針やグランドデザインに基づく学力向上に向けた組織的な取組の改善・充実により、	2.96	3.08	3.20	3.16
	学力に関わる数値目標等の達成を図る。	2.54	2.79	2.70	2.83
(2)	各種調査等の結果から課題が明らかとなった領域の繰り返し指導や毎時間の学習の振り返り活動により、	2.84	2.88	3.20	3.25
	基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。	2.67	2.75	2.80	3.07
(3)	目的を明確にした話し合う活動や各教科等の特質に応じた言語活動の充実により、	2.80	2.96	3.10	3.40
	思考力、判断力、表現力等を高める。	2.54	2.71	2.70	3.08
(4)	子どもが見通しをもって学習に取り組むことができる目標提示により、	3.16	3.38	3.40	3.48
	学習意欲を高め、主体的に課題解決に取り組む態度を育む。	2.88	2.96	3.20	3.28
(5)	教職員の共通理解を図った指導の充実により、	3.40	3.42	3.60	3.30
	一貫した学習規律の徹底を図る。	3.04	3.29	3.50	3.11
(6)	家庭や地域と連携した学力向上の取組により、	2.80	2.92	2.90	2.85
	目安の家庭学習時間等の達成を図る。	2.50	2.63	2.70	2.96
H30.9月 より新設	①授業では、わかりやすい授業となるよう、実物投影機などICTを活用している。	△	2.79	3.15	3.43
	②授業では、加配教員を効果的に活用して個に応じた志度の充実が図られている。	△	3.21	3.26	3.38
	③放課後や長期休業期間を活用した効果的・計画的な補充学習を行っている。	△	2.79	2.84	2.84

4. 今後の課題

全国学力・学習状況調査の結果や標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」の結果では、今年度、数値としての学力の向上が見られなかった。今後は、以下の点を課題として、全ての児童の確かな学力を育むことができるよう組織的に推進していく。

(1) 教員の授業デザイン力の向上

- ① 単元全体を通して、また、単位時間で身に付けさせたい力（学習指導要領に示されている目標・内容等）を明確にした授業
- ② 児童が主体的に取り組める課題の工夫（意欲を喚起する課題設定・必要感のある課題設定）
- ③ 表現する力や自分の考えを論理的にまとめる力を育成するための思考する場面や表現する場面、交流を通して考えを広げたり深めたりする場面の設定

(2) 対話的な学びをさせる授業の展開

- ① 「傾聴」の態度を育むための学習規律の全校的な取組の実施
- ② 対話を通して考えを広げたり深めたりするための「ハンドサイン」やつなぐ言葉「虹色階段」などのツールの活用
- ③ 目的を明確にした交流の場と目的に応じた場の工夫（人数、方法など）

(3) 基礎的・基本的な学習内容の確実な定着

- ① 各種検査から明らかになった課題に応じた習熟度別少人数指導の実施
- ② 指導目的に応じたチーム・ティーチングによる授業（T1、T2の効果的な役割分担）の実施
- ③ 学習内容と関連を図った家庭学習の工夫
- ④ 放課後を活用した補充学習の実施
- ⑤ 学習の基盤となる言語能力を図る読書活動の充実